

column

コロナ禍の災害



41年勤めた消防本部を昨年3月に定年退職し10

回ほど県外へ出かけた。防災関連の学会や役員を務める競技団体の会議等に出席し、その足で古寺巡りや座禅体験、心身が癒される感覚が心地好い。特に弘法大師空海が1200年前に開いた天空の聖地高野山、静寂に包まれた奥之院に感銘を受け、二度訪れた。

しかし今年に入り、研修やスポーツ大会は全て中止、会議は書面やオンラインに変わった。退職前から計画していた震災9年目の被災地視察を兼ねた三陸鉄道の旅は取りやめた。

私たちの日常がこんなにも脆く急激に崩壊するとは想像出来なかった。今、世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス感染拡大。国内で初めて患者が発表されてから数か月で緊急事態宣言が発出され、「三密」「ソーシャルディスタンス」「ウィズコロナ」等の新しい言葉も生まれた。人々の動きを止めれば感染拡大は防げるが、緩めると再び感染が拡大する。目に見えない恐怖との戦いと共存はいつまで続くのか、人と人を遠ざけてしまう感染症の怖さを痛感している。専門家によるとウィズコロナの時代はしばらく続くそうだが、国内外を自由に行き来できる普通の日常を取り戻すことを切に願うばかりだ。

■複合災害

現在の状況から想定される複合災害について話してみたい。複合災害とは二つ以上の災害が同時期または復旧の途中で発生することである。

「天災は忘れた頃にやってくる」をご存じだろうか。情報伝達のスピードや災害多発時代の現在ではあてはまらないとの声もあるが、これは明治昭和の時代に活躍した物理学者で随筆家の寺田寅彦が残した日本で最も有名な自然災害への警句である。

寺田は、1932年著書『津波と人間』で、コロナ禍の中で苦悩する今日の私たちへの警告とも取れる言葉も残している。原文「困ったことには自然は過去の習慣に忠実である。地震や津波は新思想の流行などには委細かまわず、頑固に、保守的に執念深くやってくるのである。」解説すると、自然災害は世の中がどのような状況下であろうが、頑固にも定期的に確実にやってくるということだ。今年7月熊本県を中心に発生し、多くの犠牲を払った「令和2年7月豪雨」も複合災害と言える。1771年石垣島や宮古島で約1万1千人が犠牲となった「明和の大津波」では、赤痢が蔓延したと伝えられている。

災害大国である日本では歴史的に見ても多数の

複合災害が発生している。奈良の大仏の造立は地震災害と感染症（天然痘）の複合災害から立ち直るための復興対策であったことは有名である。日本の歴史を振り返ってみる。

734年 畿内七道を揺るがす大地震が発生
735年 天平の大疫病（天然痘と思われる疫病が大流行し総人口の3割前後が死亡）
747年 奈良の大仏造立（災害や疫病からの復興対策）

863年 越中・越後地震（都でインフルエンザと思われる疫病が蔓延する）
864年 富士山が大噴火
869年 貞観地震（東日本大震災と同規模の地震津波被害）
887年 仁和地震（南海トラフ三連動の大地震）

1854年 安政東海地震（南海トラフの東側半分で発生）
安政南海地震（32時間後に南海トラフの南側で発生）
1855年 安政江戸地震（関東地方南部で発生）

